

子どもたちへの地域支援の未来 栃木県の NPO 法人の活躍に目を向けて

大類 遥

(1) なぜ、今子ども支援について考えるか

私が子どもへの支援について調べるきっかけとなったのは、宇都宮市で何度か参加した「こっころ」という団体でのボランティア活動である。「こっころ」は2010年に宇都宮で設立されたサークルだ。コンセプトとして「周りに同じくらいの子どものいない、公園でたくさんママたちと話すのはちょっと苦手、でも親子で楽しく過ごしたい！そんな親子のための居場所作りとして設立しました。」と書かれている¹。こちらで、何度かイベントに参加し、現状行われている親子への支援の一片について知ることができた。

参加して最も感じたのは、1つの取組または1側面の活動では多様な子どもたち全員を対象にすることが難しいということである。絵本を読んでもらって楽しいと思う子どももいれば、じっとしていたくない子どももいる。工作が大好きな子もいれば、全部お母さんに任せてしまい材料で遊ぶ子どももいる。そんな状況を実際に目で見て、多様な活動が求められる実態があることがわかった。また、このサークルは地域に密着した形で活動を行っており幅広い年代の子どもたちが参加しているように見えたことから子どもたちの多様性を知ることができた。

しかし、活動への参加を通して問題点に気づいた。こうした親子向けのサークルまたはイベントが地域にたくさんある中で、その支援を受けることができない親子がいることだ。この点については、活動に参加する中で個人的に関心をもった。こんなに楽しいサークルがあっても、参加できず輪に入れない子どもたちがいるという現実に気づいたのである。前述したようにこのサークルに参加している子どもたちだけでも多様な支援や遊びが求められているのだが、さらに幅広い支援が必要になる。子どもたちへの支援は容易ではない。この気づきをきっかけに、社会では子どもや親子にまつわる課題が点在していることを知ることができた。そしてもっと調査したいと思うようになった。

「子どもたちへの支援」について調べるなかで、子どもたちだけでなく「子どもと親子の孤立や貧困」について特に興味をもった。子どもの孤立とは子どもが保護者(ほとんどが親)から相手をしてもらえなくなってしまうこと、親子の孤立とは親も子も社会的に孤立してしまうことをいう。前提として貧困は孤立を招き、孤立は貧困を引き起こす。この2つは切り離せない関係にある。これらの問題を抱えているために、居場所づくり等の現在活発に行われる支援から抜け落ちてしまうことがあるのだと分かった。この論文ではどのような支援があるかを調査したうえでそれらを評価し、今後どんな支援を生み出せるかについて考える。そして最後に地域から行える支援とはなにか、述べていく。

このテーマについては1度実際に授業を通してインタビュー調査を行った。2年後期で受講した「社会調査法」という授業で、関心を持つトピックについてインタビュー調査(質的調査)を指示された。その際に地元の日光市で活動しているNPO法人「だいじょうぶ」のスタッフから話を聞くことにした。そのインタビューでは、私もこの問題についてまだ知識不足であったため「子どもと親子の孤立・貧困」の原因を探ることを目的とした。そして原因の根本的解決について簡単に考察し、調査報告書とした形で課題を作成した。「だいじょう

ぶ」は、子どもへの虐待防止のため 2005 年に設立され、虐待の問題に限らず親子に寄り添いながら支援を続けている NPO 法人である²。そこでのインタビューで得た情報をこの論文でも使用することとする。インタビューを行った日時は 2019 年 10 月 21 日である。本インタビューは、当時の取材メモから随時抜粋という形をとる。その影響で、若干のニュアンスの違いや本人の言葉そのままの掲載ではないことを了承いただきたい。

また、現在の社会状況も問題提起に大いに影響していることを断っておく。新型コロナウイルスの感染拡大を受け、様々な職業に就く人々が影響を受けた。そのため以前よりも金銭面で問題を抱える家庭が増えていくと予想される。金銭面での支援は行政等でも十分に検討されている。しかし彼らの問題は金銭面の支援だけで解決するものではないのだ。次章から私がテーマとする「子どもと親子の孤立・貧困」とは何かを取り上げる。

(2) 「孤立・貧困」に悩む子どもたち

ここではとくに「子どもたちの孤立・貧困」について解説する。日本財団のホームページによると「子どもの貧困とは相対的貧困にある 18 歳未満の子どもの存在及び生活状況のことを指」しており、「経済的困窮を背景に教育や体験の機会に乏しく、地域や社会から孤立し、様々な面で不利な状況に置かれてしまう傾向」があることが問題であるとされている³。ここでいわれる「相対的貧困」とは「その国の等価可処分所得（世帯の可処分所得を世帯人員の平方根で割って調整した所得）の中央値の半分に満たない世帯」を指している⁴。

相対的貧困に陥る子どもたちは、家に全くお金がなかったり親がいなかったりという問題を抱えているわけではなく、衣食住に差し支えない状況といえる。そのため、生活は営めるものの周囲と比較して貧困を感じる生活をしている。私はこの点で子どもたちが苦しさを抱えているのではないかと予想している。インタビューで印象に残っているのは、お金がないだけの貧困はあまり問題ではないという話だ。お金がないだけで、親子関係がしっかり成り立っていたり親の人間関係が社会に開けていたりする家庭はあまり貧困や孤立の問題が課題とならないようだ。

子どもは金銭面で思い通りにいかないかもしれないが、親子の交流が円滑であればしっかりとコミュニケーションをとって生活していくことができる。また親が社会に開けていれば、親同士での情報交換があったりどうしても手に入らないものに対しては貸し借りを行ったりできるだろう。そのため不自由を感じにくい生活ができるのではないかと思う。これらから私がテーマとする貧困やそれに伴う孤立とは異なるとわかる。

つまり「子どもたちの孤立・貧困」とは生活には困窮していないが、親子関係がうまくいっていないことが多いといえる。さらに親も様々な要因から孤立状態にあることで、子どもたちがプラスアルファの豊かさを得られないことである。これらの貧困の要因を「関係性の貧困」と呼ぶそうだ。そしてこの貧困には、子供のころの生活が大きく影響しているため親から子へと受け継がれていくのだ。私はこうした行政による支援にいたらない貧困に困窮する親子に注目していきたいと考えている。つづいて、次章において現状で活躍している栃木県内の NPO 法人について調査する。

(3) 隙間を埋める支援の存在

栃木県内にある、本論のテーマとすることがらを目的としている NPO 法人についてそれぞれ調査した。支援者の調査の対象として NPO 法人を選んだのは、現時点で行政からの支援

からは漏れてしまっている事実があるからだ。行政からの支援で不自由がなければこうした貧困に陥る親子はいないはずだ。行政からの支援では隙間に落ちていつてしまっているからこそ、そのニーズに合致した NPO 法人によって現在支援が行われつつあるのだと思う。今回は内閣府による NPO 法人ポータルサイトを利用して広く NPO 法人を調査した。調査方法としては、「子どもの健全育成」の分野の中で栃木県に事務所があるものを調べた。そして、目的や事業内容等が今回掲げるテーマに合致する法人のみを対象とした⁵。本調査から現状の支援を知り、今後の提案への足掛かりを得ることが最大の目標である。さらに前提として現状の支援について理解できていないと、ここでの提案の質が下がってしまうからだ。今回調査した NPO 法人それぞれについて、下の表 1 で示す。

表 1 「県内における子育て支援 NPO 法人の活動」

NPO 法人名	活動内容
子育てほっとねっと (那須塩原市)	つどいの広場「まーる」「ほっぺ」とホームスタート(家庭訪問型支援) ⁶
ウィズ(宇都宮市)	子育てサロンと未認可保育園 ⁷
キッズシェルター(那須塩原市)	訪問型家族支援と短期支援事業(ショートステイ)とフード・文具・衣料バンク ⁸
咲らん坊(日光市)	カンガルーサポート(産前産後の家事支援) ⁹
ビリーブ(小山市)	NPO 法人「サバイバルネット・ライフ」の運営する施設を受け継いだと書かれている。他団体と比較し、特色ある活動は見受けられなかった ¹⁰ 。
子どもの育ちを支える会 さくらネット 小山(小山市)	特色ある活動は見受けられなかった ¹¹ 。
コドモネットらくだ ーず(宇都宮市)	Facebook のアカウントがあるが具体的な事業の説明はなかった ¹² 。
子どもとなり佐野 (佐野市)	特色ある活動は見受けられなかった ¹³ 。
その他	インターネットでホームページがなく、調査ができなかった。

表 1 の補足として、「子どもの育ちを支える会 さくらネット」の情報を得た「おやまちニュース」の詳細を述べることにする。このページは NPO 法人ワーカーズコープ(小山地域福祉事業所)の堀達哉によって作成されている。個人のブログページではあるものの本人が小山市まちなか交流センター「おやま〜る」、小山市市民活動センターの運営の指定管理期間中に小山市に関する資料等を独自に掲載していた。2020 年 3 月をもってワーカーズコープによる指定管理期間が終了したとのことであった(2020 年 6 月現在)が、十分参考にできるページとして取り上げる。

以下、特色ある支援を取り上げそれらについて考察をする。

第 1 に、調査した限りではどの法人も「学習支援」や「放課後の居場所」、「子ども食堂」

といった支援を行っていることがわかった。つまりこれらの支援は当たり前に行われているため、今後はこれらでは支援しきれない溝や穴を埋めていく必要があると理解できる。または、より質を高める必要がある。

第2に、調査した中で特色あるものとして「訪問型の家庭支援」や「サロンや集いの場づくり」や「短期の支援」があった。従来の支援ではなかった形のもので生じているようだ。

例えば「訪問型の家庭支援」では、やりかたによっては児童相談所の家庭訪問による調査を思い起こさせてしまう。しかし家庭への訪問を行うことで親子の生活について詳しく知ることができ、改善策を生み出す土台も見つけられるかもしれない。こうした効果も期待できるため、訪問型支援をポジティブなカタチで行いたい。そのためにはどういった工夫が求められるのだろうか。

また、「サロンや集いの場づくり」は実際にその場を作るだけでは支援といえない。そこに人を集めることあるいは自然に集まってくる必要がある。孤立に悩む親たちはこうしたコミュニティに参加する経験がなかったり、自ら避けてしまったりしている可能性が高い。彼らの参加の促進を求めるべきなのか、それともこの支援のカタチでは足りないか理解すべきなのか。2つの考えが挙げられる。

第3にこの調査で1点、疑問点があった。ほとんどの法人の事業内容において、「子育て支援」と書かれていた。これはどう理解すれば良いのだろうか。事業の1つとして子育て支援を挙げているため、具体的に何を行っているのかが見えてこなかった。通常、事業とは概要ではなく実際に行われている活動を紹介すべきではないだろうか。例えば子育て支援のために24時間相談窓口を作っているといったように何か取り組みがあるはずだ。形もないのに「子育て支援」と挙げてしまうと、それだけで支援する側には満足感が生じる。そして今後の展開も進めにくくなる。こうしたあいまいな支援のカタチがあることにより、今回のような問題が浮き彫りとなってしまうのだろうか。さらなる調査の必要性を痛感した。次章ではどんな支援ができるのかを考えていく。

(4) 求められる支援の形とは

(3)で調査した支援をもとに、どんな支援策が足りていないのか主にインタビューの内容をもとに考えよう。ここでは彼らの根本的問題と向き合っていける可能性を見出すことと形式にとらわれない支援の形を模索していくことを目指したい。

以下、どんな支援の仕方があるのかを例示する。自分で考えたものであるが、支援策や支援体制について、インタビューを参考にじっくりと検討していく。

第1に、流動的な、成長とともに形が変わる支援である。この形は特に、長期的に親子と関わっていく必要がある場合に有効である。子どもの身体的・精神的成長や、親が行動を変えていく流れに合わせて支援の形を変えていくというものになる。成長や変化の流れをくんで支援を続けていくのであれば必要な支援は一定ではないはずだ。また先ほどのボランティア活動での知見から言えば、一定の支援では子どもたち1人1人に対して満足感を与えられるとはいえない。例えば、子どものコミュニティの中心といえる学校はもちろん成長に応じて変わる。この変化に応じて支援を変えなければならないだろう。前述の家庭訪問の時間帯を変えることや、家事の支援としてお弁当作りの代わりに洗濯・裁縫が求められることなどがある。インタビューでは成長していくにしたいが、勉強の環境づくりが求められると聞いた。特に関係性の貧困によって苦しむ子どもたちが、将来貧困に悩まない生活を送

るためには勉強が最も重要だという。本テーマにおける家庭に育った子どもは勉強を親や塾の先生に教わることができず、成績が上がりにくい。親も同様の環境で育った可能性が高く十分に学校教育を受けられていないといえるからだ。また塾や家庭教師に回せるような金銭的余裕がないことが多い。そして十分に学校教育を身に着けられないことで、望んだ職業に就くことが困難になる。だからまた貧困のループに陥る。このことから、成長に応じて学習環境を整えるという支援も求められると分かった。成長に沿って形を変える長期的支援の必要性の根拠といえるだろう。

第2に、それぞれの問題と付き合い、ひとつひとつの家庭と密接に関わっていく支援・支援に携わる人を増やし、基本1家庭に1人が介入して支援に取り組むことを重視して行う支援である。これらは1人の支援主体が多数家族に関わることで常に連携を取ることができない場合があるという危惧をもとにした支援である。社会及び地域に様々な問題や課題がある以上、やはり支援主体は限られてくる。そのうえで、いくつもの家庭支援を少人数で同時に取り組むことは不可能に近い。全家庭に対する満足な支援は行えていないのではないだろうか。近年の虐待のニュースでも児童相談所による保護等の支援が十分でなかったために子どもが亡くなったという悲しい事実がいくつもあったことは記憶に新しい。こうした点からも1つの主体の力だけでは支援が不足することがわかる。インタビューでは継続的な支援を行うには人員が足りていないかもしれないという不安を漏らしていた姿が印象深い。

第3に、支援に関わる人々が会議を行いながらそれぞれの家庭の問題に取り組む。活発な議論の中で新しい支援を生み出す体制だ。これは、普段の授業などから気づいた支援の形である。グループワーク中心の授業では従来の会議とはまた異なる形で課題解決に取り組んでいる。実際の現場では、どのように支援の形を見出しているのか分からない。しかし画期的な支援のアイデアを生み出すには従来とは異なる会議が求められるだろう。ある家庭に携わる本人が1人で考えるだけ、結果を報告する形の会議だけ、ではなく少し趣向を変えてミーティングを行うという取り組みがあってもいいだろう。それぞれのメンバーが困りごとに直面した時や、大きな進歩があったときに会議形式で集合する。そして1つの家庭について考えることや進歩があったことを他の家庭の支援に活かすことができるようになる。メンバー同士の交流を深められるし、自分だけでは思いつかなかったかわり方に出会えるかもしれない。社会では核家族化がすすみ、以前では地域や家族みんなで行っていたことも個人で行わなければならない時代になっている。孤独を感じる親子と交流していくうえではみんなを支えている、みんなに支えられているという双方の意識が重要になってくるのではないだろうか。

第4に、常に問題に向き合っていけるようなペアでの協力支援だ。これは親子と主体側が信頼関係を育むことを目的とした、支援に取り組むチームの形の提案である。従来はおそらく1人で複数家庭に関わると予想している。第3に挙げたように全員で考える等の取り組みもあるが現実的な形はペア型ではないだろうか。ペアであれば支援者同士の連携が保ちやすく、情報の差も出にくくなるだろう。毎回のようには会議を開催する必要もなく協力体制を保つことが可能である。親子との信頼関係及びペアの繋がりを強化していける形といえる。

なぜ、信頼関係や人々の関わりを重視した支援体制や支援策を提案するのか。その要因には以下のような課題がある。今回のテーマにおいて「子どもたちと親子の孤立・貧困」

について、この言葉からは「子どもたち」の事ばかりを考えてしまう。しかしそうとは言えない。インタビューでも聞いたことだが、子どもたちだけではなく親の孤独感や閉塞感も大きな問題の1つとして取り上げられる。彼らは普段、学校の先生をはじめとする様々な立場の人に注意されながら過ごしている。子を保護する立場としての役割を全うできていない部分があるからだ。

前述のように、彼らもかつては貧困生活を強いられていた可能性が高い。想像できないほどの孤独に悩まされながら、助けてくれる人もいないような小さな世界で苦しんで生きてきた。弱さを出せずにいる親も少なくないという。だからこそ、今支援者が親の心をほぐしていけるような働きかけが必要だ。つまり、そうした支援策や支援体制こそが求められているといえるのだ。親と子だけの小さな世界の中に支援者が入っていくことで、味方になる人が増え世界が広がっていくことが望まれる。

もう1点、重要視することがある。前提として、子育ては1人では行えるものではない。そのため、本来であれば、「孤立」は最も望ましくない状態である。また、子どもたちが成長していくうえで、外的要因の影響はとても大きい。生まれてから今までの外の世界が成長に影響するということだ。親の負担面や孤独面だけでなく、子どもたちが健康に、幸福に生きていくためにも支援の形の模索が必要になってくる。

これらから、できるだけ多くの人に関わる、または人と人とが密接に関わっていける支援が大変重要になることがわかるだろう。

(5) 親子へのサポート、地域ができること

本論のタイトルは「子どもたちへの地域支援」である。だが、これまで述べたように子どもたちだけに向けた支援では足りない。子どもたちに対して望ましい支援を行い、健康に生きていけるように育てていくには、親へのサポートが欠かせない。そのため、多くの人々との関わりと包括的なサポートを親子に対して提供することが最大の課題となる。

そこで、私は次のような支援展開を提案する。(3)と(4)で得た知見から、含むべき何点かの要素を挙げる。第1に、訪問型で支援を行うこと。親子の実態を知り、外に出ていくことが困難な家庭でも支援の対象とすることができる。しかしこの場合、(3)でも述べたように一部の家庭からは非難を受けやすいと考えられる。この問題については信頼関係の構築が重要な役割を果たすだろう。親子の世界に入っていけるような信頼関係を築くことができれば、家庭への訪問も容易になり積極的な支援が行えるのではないだろうか。積極的な支援とは、SOSを聞いてからの支援ではなく生活にかかわる中で見つけた問題への支援を行うことと定義したい。また、どのように訪問を可能にするかという問題も挙げられるだろう。その点については、次で取り上げる。

第2に、出会いを重視すること。「集いの場づくり」といった支援があったが、これだけでは参加できない親子も多いだろう。だからこの形を少し変えたい。1つとして、限定的な場所を作り出すのではなく、話を聞けるような人員を増やしていくことが求められる。住民がよく利用する場所に簡単に相談できるようなコーナーを設けること、電話相談に限らずメール等の多様な相談のかたちをつくることが提案できる。ここで、支援を求め人々に出会わずはお話をしましよと展開していく。家庭訪問ができるような信頼関係を、じっくりと作っていくことに繋がることになってほしい。

第3に、具体的な支援はペアで行うこと。(4)でも思考したが、ペアという形が最も適し

ているという結論に至った。ペアの形であれば、支援者同士の連携がとりやすく話し合いながら支援を進めていくことが可能だ。支援者側の負担も小さくし、関わっていくことができるだろう。限られた人との関わりであることが、親子にとっての信頼感にもつながってほしいと思っている。

この場合、彼らの世界を広げることにならないという観点もある。だが、閉塞された家庭において第三者が関わり、話を聞く相手になるだけでも世界は変わるだろう。多人数による支援だったり、毎回異なる人員が訪れたり、という環境はこれまでの生活を考えると家庭にとってあまりにも受け入れがたいだろう。もちろん支援の導入をペアでの関わりから始め、少しずつ外に出ていくような展開を作っていくことも可能だ。

以上を踏まえ、地域になにができるだろうか。私は支援主体が地域である必要はないと捉えている。こうした細かいニーズの支援を地域および行政に押し付けても今と同様の状況が生じるだけだ。主体は先ほど調査してきたようなNPO法人や、地域内の有志グループでも良い。現段階では限定する必要もないため、ここでは誰が担っても良いであろうという結論に留める。地域支援と挙げたのは、こうした支援が円滑に、地域の温かい目のもとで行われるようなものになってほしいからだ。つまり、私達自身の気持ちや意識が地域支援の輪郭といえる。孤立に悩む親子への支援は、私たちの目に映らないものであることが多い。社会の変化により近所同士の付き合いも少なくなっていることから、子育て世代が身近に暮らしているのかわからない住民も多いだろう。しかし、今を生きる子どもたちはこれから作っていく、期待される存在である。だからこそ、地域に暮らす子どもたちの将来を守るための支援を理解してほしい。地域の誰にでもできる支援がある。それは、彼らの生活をいつでもあたたかく見守っていくことだ。

-
- 1 子育て応援サークル こっころ HP <https://coccoro.amebaownd.com/> (2020年5月)
 - 2 認定特定非営利活動法人だいじょうぶ「もうだいじょうぶ あなたは一人ぼっちじゃない だいじょうぶ だいじょうぶ」(リーフレットの表紙に書かれている言葉です)
 - 3 日本財団 HP「子供の貧困対策」(2020年5月現在)
https://www.nippon-foundation.or.jp/what/projects/ending_child_poverty
 - 4 同上
 - 5 内閣府 HP「NPO法人ポータルサイト」(2020年5月現在)
<https://www.npo-homepage.go.jp/npoportal/>
 - 6 NPO法人「子育てほっとねっと」～地域において地域の人の手による子育て支援～(2020年5月現在)
<http://www.hottonetto.com/index.html>
 - 7 特定非営利活動法人ウィズ NPO法人ウィズ(2020年5月現在)
<http://npowith.net/>
 - 8 NPO法人キッズシェルター-ひとりで頑張らないで 応援します！あなたの子育て(2020年5月現在)
<https://kids-shelter.jimdofree.com/>
 - 9 特定非営利活動法人 咲らん坊(2020年5月現在)
<https://npo-sakuranbou.jimdofree.com/>
 - 10 下野新聞 SOON『子どもの安らぐ場を守る 支援施設の運営引き継ぐ 小山でNPO法人発足(2018年1月記事)』(2020年5月現在)
<https://www.shimotsuke.co.jp/articles/-/11292>
 - 11 おやまちニュース:おひさま通信 NPO法人 子どもの育ちを支える会(2020年5月現在)

<https://oyamachi.blogspot.com/2018/08/npo.html>

¹² Facebook 「コドモネットらくだーず」 <https://www.facebook.com/rakudars>

¹³子どもとなり佐野 <https://kodomonotonari-sano.jimdofree.com/>